事務局 amateur スタッフによる

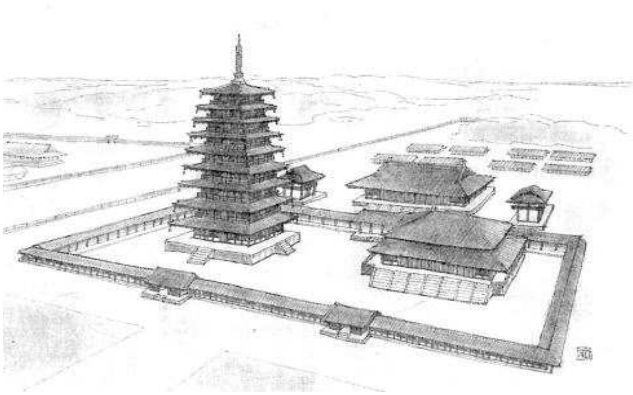
フォロー・アップ メモ・ランダム

明日香 探訪

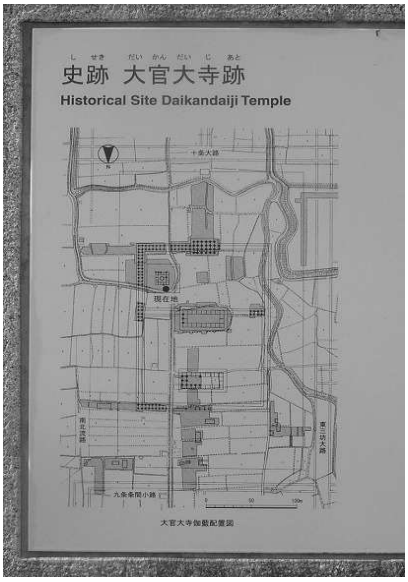
米子に赴任して驚いたことの一つに、市街地周辺の田んぼにシラサギが舞っている風景があります。駐在している伊勢の地にもシラサギはいますし、数は少ないですが、少し大型のアオサギもいます。雪国では目にしたことがないサギのような水鳥が人とともに生きている風景が、米子や伊勢にはあるのです。仏教が伝来した時代の明日香の地には、枕詞となるくらいに多くの水鳥が舞っていたのでしょうか。そして今の明日香はどうでしょう。狩野先生の「飛鳥のお寺」の話しを思い出しながら明日香を訪問してみました。

大官大寺

平城京大安寺の『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』には、前身寺は大官大寺であり、その前身寺は高市大寺、更にその前は百済大寺であると記されています。しかし、大官大寺は建築途中の和銅4年(711年)に火災により全て灰燼に期しました。この焼亡時の建築進捗状況は、金堂と講堂は完成し、塔本体は完成していたものの基壇化粧などの最終工程には至っていなかったようです。また中門、廻廊はまさに建築途中であったと「扶桑略記」に記されています。昭和48年から57年頃まで行われた発掘調査で、大量の焼土や焼けた瓦が発見され、その信憑性が裏付けられました。さらに創建時の中心伽藍の規模と配置も明らかとなり、塔はその基壇規模などから伝承のとおり九重塔であったと推定されているそうです。残念ながら大官大寺は現存していないのです。日本で最初に天皇が建立した百済大寺は、桜井市にある吉備池廃寺がそれにあたるとほぼ断定されています。左の絵はイラストレーターの早川和子さんが書かれた百済大寺の想像図です。大官大寺についても、発掘調査の結果から伽藍配置などの情報が得られています。金堂の土壇が現存するようですが、地図を見ると甘樫丘の数百m北のところに大官大寺跡とあり、これと言った画像がありません。それでも現地に行けばそれなりの想像ができるのではないかと期待していました ・・・



大寺院だった百済大寺（吉備池廃寺）の想像図＝イラストレーターの早川和子さん作



国道165号から県道214号に折れて、奈文研の横をさらに南下したところを細いわき道に入ると左右は田んぼばかりの道になります。農作業にはもってこいの天候に、地元の人が何人か仕事の準備に取り掛かっています。突き当たりを右折したところに「史蹟大官大寺址」と書かれた石の標柱が立っています。その一区画先に「伽藍配置図」と解説が書かれたプレートが石にはめ込まれています。発掘調査では、「現存する土壇は金堂土壇である」ことが明確になったそうですが、土壇とは標柱が立てられている周囲の田んぼより少し高い畑のことでしょうか。にわかには信じられないくらいに風景に同化してしまっています。周囲を見渡して見ても、道路端にある林のせいか、大和三山(天香久山、耳成山、畝傍山)もどれか判然としません。大官大寺が建設中だった時代を想像するにはまだまだ未熟であることを思い知らされました。

ところで、のどかな里村風景でありますが、観光化の影響でしょうか、シラサギの姿を見つけることはありませんでした。

元来た県道をさらに南下し、甘樫橋を過ぎたところから左のわき道を廻り込んで飛鳥寺の駐車場前に出ました。GW中とは言え、祝日でもなく時間も早いのか、駐車場には余裕がありました。

飛鳥寺

飛鳥寺は、蘇我馬子が飛鳥真神原にあった衣縫造祖樹葉の家を壊して造営した寺です。右の復元図は本堂(元中金堂)内の壁面に掛けられているものです。その伽藍配置は、一塔三金堂をもつ「飛鳥寺式伽藍配置」と呼ばれる独特の配置で、高句麗の清岩里廃寺などがその起源ではないかという考え方がありますが、飛鳥寺と全く同じ伽藍配置をもつ寺院は、現在のところ他にないそうです。

飛鳥時代に創建されたこの寺は、およそ1,400年の間に落雷等で二度の火災に遭い、本堂までをも失ってしまいます。そして一時は廃墟となり、雨ざらしのまま打ち捨てられていたとも言われます。「古事記伝」を著した本居宣長もこの飛鳥寺を訪ねており、当時の記録として、門などもなく、かりそめなる堂に本尊が安置されているだけと書き残しているそうです。現在の飛鳥寺の建物は江戸時代に再建されたものです。

拝観料を払って本堂の中に入ると日本最古の大仏である「飛鳥大仏」が鎮座していました。中国から渡来した仏師、鞍作止利という人の手で造られ、東大寺の大仏よりも150年以上も前のことで、飛鳥時代からずっとこの場所に座っておられます。1981年の調査では、大仏の台座は花崗岩ではなく、竜山石(凝灰岩)製であることが分かりました。また、その上の須弥座は後補と思われていましたが、内部に当初の竜山石(凝灰岩)製の須弥座の一部が残存していることが分かり、このことから、石造の台座は当初から銅造釈迦如来像を安置するために造られたものであり、飛鳥大仏は飛鳥時代から同じ場所に安置されていることがあらためて確認されたということです。

飛鳥寺を建立した蘇我氏は堅塩媛と小姉君の二人の娘を欽明天皇に嫁がせ、用明天皇、崇峻天皇、推古天皇の外祖父として絶大な勢力を誇っていましたが、乙巳の変で蘇我本宗家は権力の中枢から排除されてしまいます。飛鳥寺の西に100mほどのところに入鹿の首塚とされる五輪塔が祀られていますが、何の表示もないのでそれと知らずに通り過ぎる観光客が多いそうです。

百済からの仏像を蘇我稲目が祀ることになり、推古天皇の時代に豊浦寺と称した跡地に向原寺があります。大連物部尾輿の讒言により、難波の堀江に破却されてしまった仏像ですが、その後日譚に関わる寺院と知って訪ねてみると、蘇我氏と縁のある住職が色々とお話し下さいました。 *“--百済の聖明王は、不治の病の娘をお釈迦さまに救ってもらった印度の月蓋長者の生まれ変わりで、その後日本で生まれ変わって難波の仏像を拾い上げます。その仏像のお告げから、月蓋長者や聖明王のことを知って故郷に持ち帰って安置したそうです。--”* 仏像が安置された寺は現在でも無宗派で、一遍上人を始め、親鸞、重源、良寛などが参拝した記録があるそうです。近年、その寺で修行する若い僧侶たちが、同胞であるチベット仏教に示した人権活動も話題になりました。 夏にでも足を運んでみたいです。

※ 古代史(弥生時代～飛鳥時代)に疑問をお持ちの方、疑問・質問・反論　大募集　(体裁は自由ですが、文書でお願いします)